

PART 2.

妻と孫を
相棒に



地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫

「ジジ」の単独猪猟

② 過去と未来の狭間で

神奈川県 田宮 治

● 良き時代のヤマドリ猟

現在私は、本連載「ジジの単独猪猟」で紹介したように、ほとんど単独で猪猟を行っている。自分の選んだ銃に、最高級のツアイスを付け、猟具もそれなりのものを揃え、愛犬もその日の気分で使い分けている。言うなれば、とても恵まれた猟を楽しんでいる。

そんな中で、山を歩いていて突然驚くような羽音を立て、澄んだ秋空に飛び上がるヤマドリを見かけたりすると、決まって遠い昔の、田舎での良き時代の猟を思い出すのである。

今は、引金を引けば必ず発射する…のは当たり前のごとで、また五発まで連射でき、どんな場合でも安心していられるが、昔、わが家にあった銃（六挺ほど）は、どの銃も一発撃てれば

ラッキーであった。「不発」などということはよくあること、どんなにチャンスがあるうと、二発目はまず無理であった。

信じられないと思うが、ヤマドリやノウサギを前にして、狙いを定めて「よし／＼」「カチッ」…。あわてて親指で撃鉄を起こして「カチッ」、また狙って「カチッ」…ああ、とうとう行ってしまった。こんなことは、よくあることであった。

おまけに、一発撃って当たらなかつたときには、さあ大変。「周りに、切り株か立木がないか」と探すのである。このとき、銃に合わせて切ったシノ竹を銃口から素早く差し込み、ケースを抜こうとするのだが、当時のケースは真鍮でできていて、何度も使ううちに膨れてしまい、手で突いてもなかなか抜けない。

そうなると、切り株や立木に銃ごと当てて抜くのである。今、こんなことを見ている人がいたら、おそらく腹を抱えて笑うだろう。私自身、思い出して笑ってしまう光景である。しかし、当時のわが家では、それが当たり前で、兄はよく「治、竹棒だ。早く、早く／＼」と叫んでいたし、



たまには撃たないと、腕も銃も錆びつく？

ずいぶん悔しい思いをしたものである。

父も兄も「いつかはピカピカの二連銃を」と思っていたよ
うで、満兄が念願の水平二連を買って来たのは、私が中学三年生のときであった。兄は、教師になって初めての給料をはいたて(当時で約一三万円)、その水平二連を手に入れたという。

そのことを聞いたのは、ずっと後になってからであるが、改めて兄は猟が好きだったのだと感心した。なお、この銃が来て

からは、ヤマドリの沢下りに熱中するのであるが、それ以前は、沢下りは一発勝負で、私などにはとても無理であった。

●忘れられないヤマドリ猟

ある日のこと。山々は紅葉の真っ盛りであった。そこここにアケビが美味そうにぶら下がっていて、それを採りたい気持ちもあつたが、じつと我慢して、「このような蔓草の多い所には、必ずヤマドリが潜んでいる」との確信のもと、赤毛の秋田犬(小型「アカ」)を連れ、兄が背負うと小さく見えるリュックを背中にいっばいに背負い、二〇番の銃を背負って出かけた。

主人が私に代わっても、「アカ」は、いつも一緒に遊んでいるので、兄との猟のときと変わらず狩っている。私が背負ったリュックは、外が網の狩猟用のもので、中には山で困ったときに使う用品がいつも入っていて、ヤマドリを獲ると、決まってその網の中に入れたものである。

その日出かけた山は、兄達とよく行っていた山で、沢の奥まで田圃があり、いつも群鳥がいる絶好の猟場である。沢の奥ま

では、さほど深くはないのだが、滝もいくつもあり、沢下りを楽しめ、いまでも実家に帰ると兄と行っている。

天気も良いし、「アカ」も張り切って狩り込んでいます。プーンと銃の油の臭いがする。辺りはカサツ・カサツと、犬の小気味よい足音が走っては止まり、走っては止まる。

小型の赤犬を使ったときの初猟の頃は、沢下りとはまず縁がない。特に、まだ落葉していない時期に出る鳥は、必ずすぐ傍の木か、少し離れた木に止まるのである。つまり、「揚げ木猟」になる。「止まっている鳥を撃つなんて簡単ではないか」と思いがちであるが、これがそう簡単にはいかず、奥が深い猟である。当然、犬も良くなければ木には揚がらない。

ヤマドリは、見通しの悪い場所をめぐって飛び去るのであるが、犬が経験を積んで上手になると、一羽、そして二羽と、少し時間を置いて主人の様子を窺いながら狩り出す。その猟芸は実に見事なものであり、ヤマドリが飛び去ってしまったら、主人が撃たないことを確認する

と、残っている次のゲームを、まさに絶妙のタイミングで出すのである。

「揚げ木猟」でも「沢下り」でも、ヤマドリ猟で大切なことは、犬がヤマドリに逃避の余裕を与えない急襲であり、タイミングの良い突進である。

その日も、何羽目かの鳥が二羽、約二〇m前のクリの木に止まった。そのうちの二羽は、当方にとっては運よく、まる見えの状態で、「撃つてください」と言わんばかりであった。「よし、決めたぞ」。気づかれないうちに、かがんだまま狙いをつけ、思い切つて引金を引いた。「カチッ」……再び静かに狙つて「カチッ」……。あわてて親指で撃鉄を起こして撃つのだが、やはり空しく「カチッ」。「アカ」は待ちきれずに、今にもヤマドリの止まっている木に登るかのようになり、根元をカリカリし、「キヤンキヤン」鳴く。

木の上のヤマドリは、静寂の中での「カチッ」の音を察知したのか、首を大きく振つてキョロキョロしていたが、やがて一羽が飛び立った。続いて、もう一羽も飛び去った。残念だが、

仕方がない。木にはもうヤマドリは残っていないように、**「アカ」**は飛び去った二羽を追って沢の奥へと走って行った。

●夢見たヤマドリ、初ゲット

逃した獲物は大きいと言うが、まるで剥製のように、仲良く二羽も揚がったのに、ああ、どうしようもない。諦めきれない長い尾だったが、仕方なく弾を抜いて**「アカ」**の後を追った。

大きな滝の下でやっと追いつくと、**「アカ」**は上を見上げて必死に滝の横を登ろうしていた。**「キャンキャン」**小声で鳴きながら上を見ているので、その視線を上を追うと、ツバキの葉越しに「居る、いる」尻尾の長いのが……。先ほどのヤマドリかはわからないが、じっと隠れたつもりのようだ。

逸る気持ちで、ヤマドリの体が少し見えるように狙って、ツバキの葉ごとかおせるように撃ち込んだ。今度は、すごい音がした。ヤマドリは、バタバタしながら**「アカ」**の鼻先に落ちて来た。**「アカ」**は、それを受け止めるようにパクッと咥え、尾羽がちぎれそうになるほど振り

回し、喜んで咬んでいる。

私は、うれしくなつて小走りに駆け寄り、**「よしよし」**と「何度も**「アカ」**を撫でた。そして、目の前のヤマドリを見て、これが自分で獲った初めてのヤマドリだと、感動していた。

震える手でヤマドリをリュックの網の中に入れ、兄がするのと同じように、ヤマドリの長い尾を外に出し、背負ってみるとヤマドリが尻までぶら下がった感じだった。誇らしく、うれしくてうれしくてたまらなかった。**「アカ」**も何度もリュックに飛びつき、体中で喜んでいた。

私は父や兄から、その時その時の状況の中で、銃を撃つときは獲物がチラッと見えるくらいで狙いをつけるとか、スギヤツバキの葉はかぶせて撃つてもよいが、例えば小枝でも弾を止めるとか、**「追い鳥」**と言つて、後方から撃つと、例え当たつても遠くまで飛ばれてしまう。等々、多くのことを教えられていた。当然、銃の扱いに関しては厳しく教え込まれていた。

その山の状況は変わつてしまつたが、大滝は相変わらず清い水を落としており、今でも訪れ

ると、当時が昨日のどのようなに思い出される。

当時は、今と違って射撃場もなく、弾や火薬にも事欠く時代であつた。当然、射撃練習もできず、腕前は知れていた。ヤマドリに飛ばれたら、まず当たることはなかつた。よく似たもので、犬は、こんな主人に飽きも懲りもせずに、次から次とヤマドリを出してくれるのだった。

当時、主流であつたヤマドリの「揚げ木」は、犬がヤマドリを木に揚げたら、動かずに腰を落とし、上から下まで枝の一本一本を根気よく見極めるのである。また、発見できないときでも、その場にそっと立ち、視線を変えて同じように上から下、下から上……と、何回も探すのである。

ヤマドリは、自分が発見されないと思っているようで、こちらが動かなければ飛ばれることはまずない。この技術の習得が並大抵ではなく、こちらがヤマドリを見つけると、決まってそのときに飛ぶようである。要するに、ヤマドリより先に見つけることがポイントである。どちらが先に見つけるか？ 獵人と

ヤマドリの根競べである。

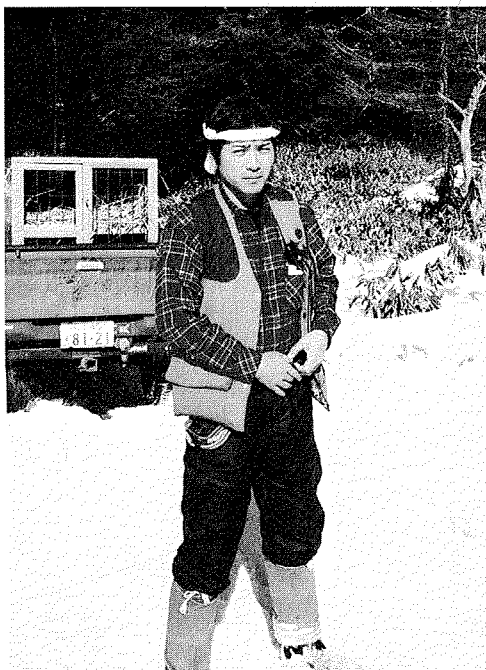
「さあ、飛んでみる」と、わが身を曝しても、木の上から下に向かうヤマドリの速さは凄まじく、見事に撃ち落とせることなどできないと言える。特に、スギ林で揚がったヤマドリは、ベテランの獵人と言えども、止まった瞬間をじっと見極めないかぎり射止めるのは無理である。少しでも視線を切ると、スギ

に溶け込んで全く見えなくなる。ヤマドリの「揚げ木」は、こうしたところに奥義やその楽しさがある。この猟に使う獵犬は、柴犬のような小型犬が一番である。愛犬の猟芸も、見ていて飽きることはない。

私にとつてのヤマドリは、獵果のある初獵の頃の、木の葉が落ちる前の猟で、いつまでも忘れることのできない、懐かしい昔の思い出である。加えて今振り返つて、父親の猟を通して示してくれた子供達への「自然教育」の大きさ、素晴らしさに心から感謝している次第である。

●関東猪犬山彦会

私は、今年度中に、一緒に猪犬を実行する仲間達と、かねて



長野の田中君。とても熱心な若者である
(長野支部設立の協力を願っている)

からの念願でもある「関東猪犬
猟山彦会群馬支部」の設立を実
現したいと思っている。私の目
指す支部は少人数で、「犬の止
め芸」の楽しさを分かち合い、
親睦を図りつつ、人生の生き甲
斐を見出せれば…と思っ
ている。なぜ今年度か？と言
うと、それは前猟期に集ま
ってくれたメンバーが、あ
まりにも異色の猟人達(八名)
であるからである。彼らの
うち二名は、群馬県でグル
ープ猟をしていたベテラン
猟人だが、よくあるグル
ープ猟仲間の意見の相違
からやめてしまっている。

残りの六名は、私が生まれ育

った新潟の山村の熊猟師の二
目達である。この六名は、ま
だ四十代であるが、全員が
ライフル銃所持者で、足が自
慢である。皆、満兄の教え子
達でもある。私は、折あるた
びに猟で彼らに世話になっ
ており、雪が積もるところで
はなく、雪が積もるところで
なく、家を守り家族を守っ
て、一心に農林業に励むひた
むきな青年達に好感を抱いて
いた。そしてかねがね、彼ら
に何とか猪猟の楽しさを知
ってほしい、一緒に猪猟が
できないだろうかと思っ
ていたのである。以前にも記
述したとおり、この地方(新
潟)の大物はクマ以外

は居ないので、実質の猟期は
二月半ば頃までで、クマが
穴に入るまでのごく短い期
間である。また、彼らの父
親には熊猟で大変お世話にな
ったこともあり、せめてもの
恩返しができるかと考
えての支部設立である。

考えてみれば、熊猟も猪
猟も同じようなもので、熊
猟で父親から叩き込まれた
技術と、あのクマに立ち向
かう度胸は、荒猪にも十分
通じると思っている。特に、
彼らは足が強いので、群
馬の岩場にもすぐ慣れるだ
ろうが、何せ年齢と育った
環境が異なるので、今は「
まあ、やってみるか」とい
った感じである。一方、群
馬の二人のうちの一人A
さんは、もう何年も前から
この地区に出猟のときは泊
めてもらったり、山を教え
てもらったり、また、酒を
酌み交わしながら猟談義を
交わしている、いわば気心
の知れた間柄である。この
方は猟好きで、東京から群
馬に移り住み、今は民宿を
営んでいる。

ないか。かまわん、かまわ
ん。群馬の免許を持っている
人なら誰が山に入ろうと、イ
ノシシを獲ろうと問題ない
よ。先に入った人に権利が
あるのだから、遠慮なく
楽しんでほしいよ。」と
知り合いの人にわざと聞か
せるように、大きな声で
助けてくれ、まさに地獄に
仏であつた。もう一人のB
さんは、Aさんの知り合い
で、群馬の山に詳しく、ク
マの穴などもよく知ってい
るベテランとのことなので、
山の案内と、皆の指導をし
ていただければと考え、お
願ひしたのである。私の基
本は、あくまで「ジジの単
独猟」であるが、支部設立
と、新しい仲間達との交流
を楽しむに張り切っていると
ある。ただ、群馬支部の設
立は、長野支部設立にもか
かわる大切な試みで、現
在長野で共猟するためにも、
ぜひ成功させたいと思っ
ている。

群馬支部設立の成功のカギ
は、もちろん私にあり、わが
愛犬にある。雪国新潟の最
北部から、は、いかに若い
六人といえども大変である。
当然、来られる回

数も限られてしまう。その限られた中で、愛犬が止めた大猪を見事撃ち獲り、猪猟の醍醐味を味わってもらいたいものである。そして、手柄話と猪肉の土産を新潟に持ち帰ってもらいたい。皆で力を合わせ、会を盛り上げていきたいと考えている。また、猟場を使わせていただく群馬県の猟人の皆様、私達は皆様の大切な猟場を荒らすことのないよう、最大限の努力いたします。なにとぞ、よろしくお願いいたします。

●愛犬の訓練と今年度の戦力

前猟期(平成十五年)は、「最



先犬アニー(左、死亡)とアニーの子リオ(右)

高軍団」と、自信を持って臨んだが、追いついた先犬「アニー」が一二五kgの大猪と戦って死亡、咬み・絡みの「シロ」号もカモシカと岩場を落ちて亡くなった。さらには、猟期明けの三月十五日、咬み止め一番の「竜」号までもが老死してしまった。

一軍の犬がこれほど欠けることは初めてであり、残念でならなかった。この三頭を欠いたことはとても大きく、今猟期が心配である。

人間は、いつも自分に都合の良いことばかり考える生き物のようだ。自分の歳も愛犬の歳も忘れ、「まだまだいける、まだやれる」と、いつまで経っても若い気である。しかし、それは気持ちの中だけのことなのに。もう一頭の「奈智」も、今猟期の出猟は危ぶまれる。仲良しの「竜」の死がわかっていよう、急いで歳を感じるようになって、昨猟期の元気が消えてしまった。今は、声をかけて元気づけ、美味しいものを食べさせるように心がけている。犬舎に「竜」の代わりに「クロ」(牝二歳)を入れていくのだが、何とも寂しそうである。

三頭の一軍を失い、あわてて若犬の一軍入りに取り組んでいくが、これがなかなか大仕事である。そこそこできる若犬は何頭かいるのであるが。都市に住んでいる私の場合、出猟は遠出となるので、途中の車で鳴かないように、また泊りがけの猟



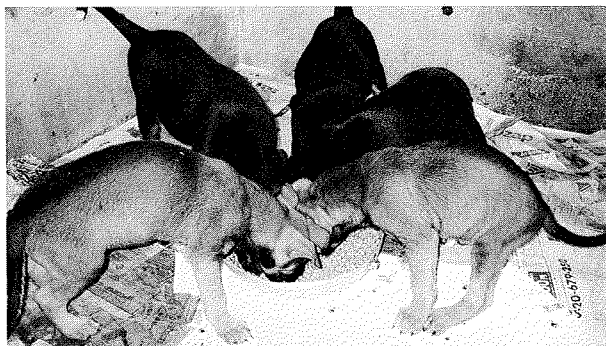
右より：ブル、シロ(死亡)、一軍犬、た(死亡)、最強軍団、奈智、ミス。

行も多いため、一流ホテルに泊まるためには決して鳴かないことが大切な条件となる。これまでの一軍は、この点も満点であった。はたして、若犬達を「アニー」や「竜」や「シロ」と同じように育てられるだろうか。近道はない。繰り返して根気強く教える以外に方法はないし、たゆまぬ努力と辛抱が必要である。

血統的には、全犬一軍の子犬達なので、あとは私の特訓次第である。それでもダメなら、切り札に母犬がいるので、移動中



竜(左、死亡)と奈智(右)



出番を待つ子犬達(「ブル」×「ラン」)

の車で鳴き出ししたり、あと一歩咬みにいかないときなどは、母犬が頼りになるだろう。子犬にとって母犬の教えは素晴らしく、母犬を真似ることで色々なことを覚えていくのである。

私は、本誌において先達の意見を参考に、独自の方法で子犬に接している。先達のように高い費用をかけた研究実験もないが、実猟で引くことよって今までの経験を前面に出し、失敗を除きながら良かった事柄をどんどん取り入れ、その子犬の持つ長所を伸ばすことが第一と考えている。

子犬を実猟に引く場合、邪魔

になることも多く、心配や苦勞もあるが、私の場合は楽しみのほうが大きい。それゆえ、楽しみながら仕上げている。この歳になると、どうしても焦りが先に立ってしまうが、決して無理をしてはならない。焦って無理をしても、良い結果は得られない。自分にとっても、子犬にとっても…。

ただ、子犬・若犬の実のある訓練も、素晴らしい猟芸の先犬があつてこそで、その点も私は恵まれていて思っている。若い頃は、体力に物を言わせて「苦勞も何のその猟」で、自ら先導犬よろしく山々を引き込むことで、その中から犬の芸が出来上がり、猟の楽しみを見出してき



少し強すぎるケン



一軍入りのチヒロ(左)とケン(右)

たように思う。

しかし振り返って、冷静な目で愛犬達を思い出すとき、良くも悪くも結局、私の実力どおりが出来上がったような気がする。



柴犬の単犬使用で「木揚げ」して、落ち着いて撃てば、空気銃でのヤマドリ射獲も難しいことではない

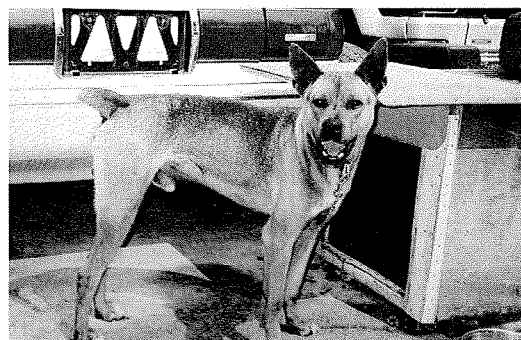
群馬県

小山 宏

つまり、私が未熟なうちは犬も未熟のまま…なのである。

最近私は、愛犬は自分の分身であり、鏡で見る自分の姿であると思っている。すなわち、世の猟人がよく言うように、「犬を見れば主人の猟技術がわかる」とおり、猟犬の世界においても「トンビがタカを生む」こともなければ、間違っても未熟な猟人に名犬などいない。人を唸らせるほどの芸を持った名犬は、狩猟の達人あつてのことである。

次に、一軍のバックについてであるが、いくら困ったからと言って、すぐ二軍の犬を一軍入



一軍入りのイチ

りさせるのは、なかなか大変なことである。言うまでもなく、力に差があるのは当たり前であるが、何よりもまず注意しなければならぬのは、「犬同士の相性」である。

最悪は、猟中のケンカであるが、こうなると猟どころではなくなるので、ケンカが起きるような組み合わせは絶対にダメである。要するに、1+1が「2」の力になればよいが、「0」になったり、最良の場合は「3」になったり、「4」になったりする。バックの理想は、1+1が3や4になるように仕上げることである。一軍を組む場合は、頭数を増やしたら、その分力も増やすことが条件であろう。しかし私は、むやみに頭数を増やそうとは考えていない。何とかイノシシをガッチリ止め、犬の力が勝ることでケガのないバックを作りたいと思っているのであり、そのことに専念している。

幸い、素晴らしい血を引く子犬が何頭も育っている。まだ幼いが、その仕草に親犬の動きを感じる事ができる。単独猟には過ぎる年齢になったが、なあと、焦ることはない。(つづく)